

## 新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る

### 令和 5 年度 業務報告書

#### 1. 入館状況について

令和 5 年度総入館者数 543,257 人(対前年度比 105.5%)

指定管理者として 5 年間の指定管理期間のうち、最後の 5 年目の管理運営を行った。充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様の安全・安心を第一に考え、満足度向上に努めた。

令和 5 年度は新型コロナウイルス感染症の影響がほぼ払拭されたと言える1年であった。5 月 8 日に感染症法上の位置づけが「5 類」に移行するまでは基本的な感染防止対策を継続し、「5 類」移行後も段階的に対策を緩和しながら、安心安全な管理運営に努めた。

入館者の状況については、ゴールデンウィークや夏休み期間に帰省客や行楽で県外から来館されるお客様などで館内が賑やかとなり、コロナ禍の収束を実感した。冬期は全国的な暖冬、小雪により、お客様にとって来館しやすい好条件となったことも影響し、最終的な入館者数は 543,257 人、対前年度比 105.5%となった。平成 25 年度、平成 26 年度に次ぐリニューアル後 3 番目の入館者数となり、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数 500,000 人以上を大きく上回ることができた。

また、年間パスポートは、過去最高であった令和 4 年度の 16,029 人に迫る 15,971 人のお客様から購入していただいた。積極的な宣伝やキャンペーンの実施、さらに口コミによる効果が現れているものと推測され、購入者が増え続けていることは、新潟市の施設を管理する指定管理者として大変喜ばしいことである。パスポート所持者の平均年間来館回数が 1 人あたり 5.6 回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身体障がい者等手帳」「高齢者施設」「小・中学校」「保育園・幼稚園等」など大方の区分で令和 4 年度を上回り、対前年度比 129.5%となった。減免入館者総数は、23,324 人で、総入館者に占める割合は 4.5%となり、コロナ禍前までに回復してきており、館の果たすべき社会的役割は依然として大きいものと考えている。

次期指定管理期間も、当財団が指定管理者として管理運営を行うこととなった。今後も、常におもてなしの心を持ち、「行ってみたい」「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービスの提供に努め、新たなお客様の獲得とピーターの確保につなげたい。

#### 2. 施設の管理運営状況について

##### (1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。特に繁忙期における開館時間の繰り上げは、朝早く来館を希望されるお客様へのサービスの提供という目的を十分果たしたものと考えている。

ゴールデンウィークは、5 月 3 日(水・祝)から 6 日(土)の間、開館時間を 60 分繰り上げた。その他、7 月の 3 連休の 15 日(土)～17 日(月・祝)及び夏休み期間中の週末の 7 月 22 日(土)、23 日(日)、29 日(土)、30 日(日)、8 月 5 日(土)、6 日(日)、さらにお盆期間の 11 日(金・祝)～16 日(水)にも開館時間を 60 分繰り上げた。入館者が増加することによる券売窓口での待機列の発生や館内の混雑に対して、時間帯ごとの入館

者数の平準化や周辺道路の混雑緩和に有効であった。

1月1日に能登半島地震が発生した。当日は休館日であり、新潟市中央区も震度5強を観測したが、水族館は大きな被害がなく、また、津波警報が注意報に変わったことから、1月2日(火)・3日(木)は例年どおり臨時開館を実施した。この地震の影響により入館者は例年を下回ったものの、初詣帰りの来館者は一定数(2日間で2,313人)あり、正月開館は定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第42条に基づく電気設備法定点検を行うため、例年どおり3月第1木曜日とその翌日である3月7日(木)・8日(金)を臨時休館した。それ以外の点検や工事については、開館時間内も含めお客様の妨げとならないよう工夫しながら行った。

今後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていきたい。

## (2) 展示生物について

協定書の仕様書に謳われている約500種、20,000点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

新型コロナウイルス対策の移動制限等が解除されたことから、魚類輸送専用車両を積極的に運用して生物交換や採集活動を行い、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を入手した。

飼育困難生物の飼育展示にも積極的に取り組んだ。アオリイカの展示を令和5年度も行き、交接、産卵行動まで来館者に見ていただくことができた。新潟県内各地の漁業協同組合の協力により、特に深海性生物の収集、展示に努めた。アバチャン、トゲビクニン、イサゴビクニン、コンペイトウ等の魚類の他、オキノテヅルモヅルや日本海固有種である両津湾産サラサベッコウタマガイを展示した。

国内希少種に指定されているコシノハゼを生息地の把握と生態の解明、啓発等を目的に環境省より許可を得て令和3年より展示しており、令和5年度は研究者を招聘して講演会も開催した。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。アカムツ(通称=バグロ)は人工育成技術開発を継続し、育成個体を本館地下の「暖流の旅」ゾーンの水槽に群れで常設展示している。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、キタノメダカを「信濃川水槽」で展示した。令和2年に三重県の伊勢夫婦岩ふれあい水族館から搬入した雄のドと当館生まれの雌との間で繁殖が成功し、7月2日に第1仔となる雌が誕生し、3月20日には命名式を行った。令和2年に葛西臨海水族園より搬入したウミガラスが初めて繁殖に成功し、7月16日に孵化、8月24日に展示を開始した。令和1年より4年連続で繁殖に成功したカマイルカは、現在も母仔ともに良好な状態を維持している。また、フンボルトペンギンは血統更新のため他施設との個体交換を実施し、その個体を含めたペアの繁殖を含めて4個体が育成している。

春から秋は「にいがたフィールド」で「にいがたフィールドガイド」を6回実施し、季節ごとの観察ポイントや自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカなどの紹介を行った。冬場は「育成室」で「育成室開放」を5回実施し、当館における魚類と無脊椎動物の飼育下繁殖への取り組みについて紹介した。

今後も、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

### (3) 通年事業の実施状況について

#### ① ペンギン解説

ペンギンの散歩道(令和5年度は新潟県内で発生した高病原性鳥インフルエンザ感染防止対策のため、通年ペンギン海岸で実施)でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。解説の一部を定期的に更新し、複数回来館された方にも様々な情報を提供できるようにした。実施場所は屋外観覧動線に面しており、およそ15分の解説時間中に気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

実施時間 11:30 13:30

#### ② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことを目的としている。令和4年度まではハンドウイルカ2~3頭とカマイルカ2~4頭で行っていたが、当館で生まれた仔イルカが成長してきたため、令和5年度から時々カマイルカ7頭(全頭)ショーを始めた。きびきびとした動きや仔イルカの紹介を入れることで、マンネリ化を避ける効果が出ている。1回あたり15分の中でイルカの種類、体の特徴、認知、運動能力などをイルカの動きとともに解説し、より楽しみながら自然に学べるショーを心がけた。また令和5年度はアナウンス研修を実施し、よりお客様が聴き取りやすく、わかりやすいイルカショーを行えるようレベルアップを図った。なお、お客様から要望のあるイルカショーへの参加は、仔イルカが自発的に上陸したり、他個体の邪魔をしたりする行動が頻発しており、参加されるお客様の安全が確保できないため、以前のようなショー構成はまだしばらく難しい。

また、冬季のイルカショーは頭数が増えたためイルカの安全を考慮し全日程屋外で実施した。令和5年度は暖冬ということもありお客様からのクレーム等はなく、新型コロナウイルスが5類に移行して冬季の来館者も多く屋外実施は適当であると感じた。毎月実施しているアンケート調査でも、概ね高評価をいただいている。

実施時間 平日 11:00 12:30 14:00 15:30

日・祝日 10:30 11:30 13:00 14:00 15:30

#### ③ マリンサファリ給餌解説

アシカ科最大の種であるトドについて1日2回、形態や生態、野生の状況、人との共存等についての解説を実施している。ひれあし類の特徴であるヒレ状の四肢や水の抵抗を受けにくい体の形などを来館者が見やすいよう行動形成し、また、体の大きいオスを中心としたハーレムを形成する繁殖生態、現在の野生での生息状況、漁業被害と保全の難しい関係性などについて最新の調査結果等から得られた情報を基に解説した。

実施時間 平日 10:30 14:30

日・祝日 11:00 14:30

④ ひれあし類解説

繁殖期によりドの十分な給餌解説が行えない時期に実施した。アシカとアザラシの体のつくりの違いや、健康管理などの様子を解説した。

実施時間 平日 10:30 14:30  
日・祝日 11:00 14:30

⑤ 日本海大水槽解説

展示生物の紹介から水族館のしくみまで多面的な情報を伝えるプログラムとして、日本海大水槽前で解説を行っている。解説の内容は固定せず、新規の生物が展示されたり、繁殖行動が見られたりしている時などは、それらを積極的に紹介している。解説の後には質問を受け付ける時間を設け、参加者の知りたいことに答えるように努めている。生物の生態や飼育設備などに理解を深めてもらう良い機会となっている。

実施時間 平日 13:45  
日・祝日 10:00 13:45

⑥ 磯のいきもの解説

磯の体験水槽で、生物を1日1回、解説を交えながら間近で観察してもらう構成としている。解説では、透明プラケースに対象の生物を入れ、体のつくりが観察しやすいように工夫している。対話を多く取り入れ、疑問、質問にもその場で回答するなど、参加者に興味を持って生物に接してもらえるよう心掛けている。来館者と直接対話するプログラム構成は、生物を観察する時の扱い方、生息環境や環境保護への理解を深めてもらうために有効であると実感している。

実施時間 平日 10:30  
日・祝日 15:15

⑦ アクアラボ体験

大型液晶モニター等を用いて、生体や標本の観察、解説を行うなど、ハンズオンを取り入れたプログラムとして行っている。哺乳動物から無脊椎動物まで幅広い生きものをテーマに日替わりで実施することで、水生生物に対する知識と理解を深めてもらう良い機会となっている。令和5年度は、新たに8タイトルを追加して実施し、水生生物の知識普及に積極的に努めた。

実施時間 平日 13:00  
日・祝日 12:30

(4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

※応募状況は「定員を定めて募集した事業」とおり

① マリンピアカレッジ

ア. カマイルカの音

東京海洋大学学術研究院の三島由夏氏を講師として招き、水中における音の特徴やイルカが出す音、聞き方、カマイルカが探知に使うエコーロケーションクリックス、鳴き交わしに用いるパルスシーケンスと呼ばれる種特有の音について、当館と共同研究を行っている「カマイルカの出産に伴う鳴音の変化、及び、仔の音声発達に関する研究」についても少しふれながら解説して

いただいた。また、実際に屋内プールに機材を入れてイルカの鳴音の収録を行い、分析し解説していただいた。アンケート結果は全体的に高評価であった。鯨類について知ってもらう良い機会となった。

イ. クラゲの不思議を覗いてみよう

加茂水族館館長の奥泉和也氏を講師として招き、最新の映像と共に庄内に出現するクラゲの紹介、クラゲの増殖方法や形態などについて、飼育の裏話なども交えて解説していただいた。本プログラムは、体験や発見も重視した内容で構成したため、クラゲの成長段階ごとの姿やエサとして与える動物プランクトン(アルテミア)の観察も実施した。先進的な内容が多くを占めたことにより、やや高度な内容での講演となったが、クラゲについて最新の知見など多くのことを学ぶ機会を提供できた。

ウ. 森林と海のつながり~木工おさかなアートを作ってみよう~

新潟の森林の成り立ちや樹木の特徴を学び、自然環境への知識や関心を持ってもらうことを目的として、日本自然環境専門学校の新潟校の渋谷浩氏を講師に招いて実施した。森林の役割や樹木の特徴を解説した後、木材を自ら切ったり貼ったりして木工フィッシュカービングを作る時間を設けた。紹介された木材を実際に使用して物作りを行うことで、海や川と森林の結びつきを感じながら学ぶ機会を提供することができた。作業に夢中になる参加者が多く、満足度が高いイベントとなった。

② 特別講演会「研究者が語る新潟県の淡水魚とコシノハゼ」

新潟県の在来生物の保護活動と外来生物対策に取り組んでいる生物多様性保全ネットワーク新潟の井上信夫氏と、コシノハゼ研究の第一人者である国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究センターの千葉悟氏を招いて講演会を行った。井上氏からは新潟県の淡水魚について、千葉氏からはコシノハゼの生態についてそれぞれ専門的な立場から講演いただいた。併せて、当館のコシノハゼ保全活動も紹介し、認知度の向上と保全意識の醸成を図った。また、ラムサール条約や新潟市がラムサール条約湿地自治体に認証されたことも紹介した。さらに新潟市里潟研究ネットワーク会議の佐潟ガイドブックを配布した。

③ 企画展示

ア. カマイルカの繁殖

令和1年から令和4年の4年連続、当館で生まれたカマイルカを詳しく紹介する企画展示を行った。カマイルカの繁殖を「出産前」「出産」「仔の成長」「仔の比較」「研究」と5つのテーマに分けて写真や動画を使用しながら紹介した。特に「出産前」では、卵胞の成長と排卵の様子や妊娠中の胎児のエコー動画や画像を用い、普段見ていただくことができない情報を発信した。仔イルカ4頭を比較することで、同種であっても個体ごとの相違点や類似点をデータとして見ることができるよう心掛けた。また実際のカマイルカは近くで見ると大きいということを感じてもらえるように、等身大の写真や模型を展示し、低年齢の来館者にも体感的に理解してもらえるよう工夫した。研究の分野では、仔イルカが発する音の変化を実際に聴いてもらえるようにタブレット端末を用いハンズオン形式の展示とした。ショーとは違った形でカマイルカを知っていただく機会となった。

## イ. 魚の色

魚の色に焦点を当て、体色と生息環境に密接な関係が見出せることを紹介した。パネル展示では、めくると答が分かるものや、動かすと答えが分かるもの、光らせると答えが分かるものなど、楽しみながら学べる工夫を多く取り入れた。光の色の組み合わせが分かる実験なども取り入れ、高度な内容を直感的に理解できるようにし、幅広い年齢層の来館者に理解していただけるよう工夫した。生体展示では、ハンズオン展示の隣に水槽を置き、イラストと同じ魚を見られるようにした。隠ぺい色の展示では 2 色の砂を敷いた水槽に、砂の色に体色を変化させることができるヒラメを入れ、上から覗ける高さに設置することで、隠れたヒラメを探す展示を行った。生体を観察しながら答えを得られることもあり好評であった。より詳しい解説が書かれた「もっと詳しく魚の色」のリーフレットを配布し、会場で得た学びを振り返られるようにした。アンケートからは「海洋生物の生態の多様性を感じました。環境教育の際に参考にしたい」「光の特性を上手に説明しており、子どもたちが興味を持つきっかけになりそう」といった高い評価が得られた。

なお、本企画展示は、船の科学館「海のミュージアムサポート」の助成を得て実施した。

## ウ. ふるさと新潟の魚

新潟県の推進ブランドであるアカムツとホッコクアカエビ、新潟市が全国に誇る銘産品に指定しているアカムツ、ホッコクアカエビ、サクラマス、ヤナギムシガレイ、アカアマダイを紹介する展示を行った。本企画展示は、新潟県の助成を得て実施した。これら 5 種の生物を展示し、形態や生態などの生物学的情報のほか、水産物としての利用についても紹介する内容とした。新潟の誇る水産物の認知度向上と魅力を伝えることができた。

なお、本企画展示は新潟県の助成を得て実施した。

## エ. SNS フォトコンテスト受賞作品展

	募集期間	掲示期間	応募作品数
①	R5/4/4~6/25	R5/7/15~8/31	150
②	R5/8/1~10/20	R5/11/19~R6/2/25	86
③	R5/11/23~R6/2/25	R6/4/14~6/30	94

これまでは、プリントアウトされた応募作品を企画展示室で展示していた。しかし、スマートフォンなどの普及により、A4 サイズのプリントに耐えうる解像度の作品の減少が見られたため、すべて SNS(X) 上で実施する方法に変更した。3 期に分け開催し、それぞれ最優秀賞作品及び館長賞作品各 1 点を館内に展示した。

### ④ 企画展示「魚の色」ガイドツアー

企画展示「魚の色」の展示物だけでは伝わりにくい、観察ポイントや実験装置の使い方や展示の工夫などを、職員が解説しながら案内した。参加者の中で希望した方に常設展示のエリアも案内することとし、企画展示では紹介しきれなかった生体を観察し、体色に関する魚の解説をした。ガイドツアーは 3 日間実施し、計 10 組 19 名が参加した。参加者の全員が常設展示エリアのガイドを希望し、案内中には質問も多く積極的に話を聞く様子が見られた。ガイドツアーとして解説することでより深い学びを提供できた。

⑤ 障がい者向け教室 サポートナイト

対象を視覚障がい者に絞り、展示内容や案内方法について特別支援学校の教師などからアドバイスを受け、触って体験できる模型や標本などを多数用意して実施した。周囲の雑音が少ないほうが良いだろうとのことで閉館後の開催とし、多くの参加者より好評を得たが、低年齢の参加者からは空腹や眠気などの意見が寄せられた。解説についてはアクアラボに設置した模型や標本には必要であったが館内自由観覧の際にはあまり求められていないように見受けられた。アンケートは概ね好評であったため、今後は当事者のニーズなどより深く情報を収集し実施したい。

⑥ いきもの教室

生物への理解と環境への関心を高めることを目的に観察や体験を通したプログラムとして7月、1月、2月の計3回行った。それぞれのタイトルは7月「水族館の水」、1月「イカの解剖」、2月「ビーバーのうんちペーパーづくり」であった。対象年齢を小学生以上に設定したことで多くの方が親子で参加され、小学校低学年の子どもにも分かりやすい内容とした。また、定員に対する平均応募率は340%で、大変人気のあるプログラムとなっており、参加後のアンケートでは、「おもしろかった」以上が94%、「また参加したい」以上が88%であった。7月の「水族館の水」では、「違う角度から水族館を見ることが出来て、とても面白かったです。別の視点から水を含め観察出来そうです」との感想をいただき、水族館観覧についての新しい視点を提案することができた。

⑦ にいがたフィールドガイド

新潟市近郊の陸水環境や生息する生物を紹介し、地域の自然環境に関心を持つ機会を提供すると共に、展示施設「にいがたフィールド」をより深く知ってもらうことを目的に8月を除いた4～10月の第3土曜日に実施した。全6回で合計20組43名の参加があった。また、令和4年11月に新潟市が「ラムサール条約湿地自治体」の認証を受けたことを記念して、ラムサール条約に関する冊子を配布し、冒頭に解説を行なった。季節ごとの見どころや、自然物を用いた体験、施設で採集した水生生物の観察などを取り入れることで、地域の水辺環境・植物・希少生物の域外保全などを学ぶ機会を提供できた。

⑧ 記念日イベント

ア. ペンギンの日

4月25日の「世界ペンギンの日」に合わせて、直近の土曜、日曜、世界ペンギンの日の3日間にもっとペンギンを知ってもらいイベントとしてバックヤードツアーと特別解説を実施した。また、4月22日から5月26日までの期間、アクアラボでパネル展示「なぜペンギンは空を飛ばないの？」を行った。パネル展示だけでは伝わりにくい部分は特別解説を行った。バックヤードツアーは1日1回約10名限定として応募者から抽選し、3回合わせて13組29人が参加した。普段は見られない飼育の裏側を見てもらいながら飼育の工夫等を解説した。今後も継続的に実施して、あまり知られていないペンギンの生態や形態、野生の状況などについて、ガイドツアーやパネル展示を通して楽しみながら知ってもらい、ペンギンをきっかけとして生物の生息環境に関心を持ち、さらに身近な自然環境に興味を持ってもらう機会としていきたい。

#### イ. カワウソの日

5月の最終水曜日が国際カワウソ生存基金により「世界カワウソの日」と定められていることから、直近の土曜と日曜である5月27・28日を中心にもっとカワウソ類を知ってもらうイベントとして開催した。5月27日から6月30日までアクアラボで解説パネルの展示を行った。5月27・28日には、カワウソ水槽前で特別解説を行い、アクアラボで毛皮触り体験とスタンプ、フォトコーナーを設置した。特別解説はカワウソ類の形態や生態、野生の状況などについて1日1回解説し、2日間での参加者は約140人であった。また、毛皮触り体験ではカナダカワウソとラッコの毛皮に実際に触れて、感触の違いを感じてもらったうえで毛皮を目的とした乱獲の話をし、参加者からの質問に答えた。今後も継続的に実施して、より多くの人が身の周りの自然環境について考えるきっかけにしたい。

#### ⑨ 田んぼ体験（田植え、稲刈り・稲架掛け、脱穀、稲わら細工）

田植え、稲刈り、稲架がけ、脱穀、稲わら工作と稲作の一連の流れを体験し、稲作と田んぼにすむ生物との関係などを知ってもらうことを目的とした。全4回のイベントに加え、草取りや草踏みなど育成と収穫に必要となる工程を新たに取り入れ、より稲作について学べる内容とした。稲わら細工では、日本の文化を伝え、収穫した米を炊き食文化についても学べる内容とした。生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境への関心を深めてもらう機会として継続していきたい。

#### ⑩ 野外体験教室

##### ア. スナガニ観察会

実施予定日が荒天で中止となり、9月3日の実施となった。当館の地先海岸の砂浜にて、スナガニをメインに観察、採集を行い、どのような生き物が砂浜を利用しているのか理解、興味を深めることを目的として行った。巣穴構造を理解するために、石膏で型を取るなどの工夫をした。アンケートに「巣穴の主の正体がわかって楽しかった」とあり、身近な生き物や地域の自然環境に興味を持って接してもらうきっかけを作ることができ、有意義なプログラムであった。

#### イ. 貝の標本づくり

貝の採集や標本作成の経験を通し、自然環境と野生生物に関心を持ってもらうことを目的に毎年実施している。当館地先海岸に赴き、そこに生息する貝類の観察と採集、標本を作成した。貝類の生息する環境の違いや体の構造を、見て触れながら観察することで、自然環境と野生生物に関心を持ってもらえるようにした。観察した貝類を自ら標本にしてもらうことで、研究資料としての役割があることを知ってもらえた。身近で行える野外体験のプログラムであることから、水生生物への関心を深めてもらう機会として継続したい。

#### ウ. 潟の生きもの観察会

潟の水生生物の観察を通し、新潟市が誇る水辺環境である里潟の価値と魅力を伝えることを目的に実施した。公園として整備され水辺へのアクセスがしやすいことから上堰潟公園を会場とした。短時間の採集で、十分な種数と個体数の生物を採集することができ、身近な水辺に多様な生物が生息していることを紹介できた。プログラムに田舟体験も加え、潟の文化についても学べる機会を取り入れた。継続して実施することにより、完成度を高め人と自然が共存する里潟の価値と魅力を、より詳しく多くの人に伝えていきたい。



⑪ ナイトツアー

通常見ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説するプログラムとして毎年度実施している。令和4年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となったが、令和5年度は新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが5類に移行されたことで、予定通り4日間開催した。イベントへの参加を控えていた風潮が収まったためか、応募平均倍率は昨年の約300%から約1,840%と6倍以上に上がった。もともと参加希望者が多いプログラムであるが、今年度はさらに高倍率であった。参加者の満足度は「おもしろかった」以上が100%と高評価であり、これは回を重ねるごとにブラッシュアップしてきたことによるものであり、今後も開催して行きたいイベントである。

⑫ イルカバックヤードミニガイド

10月14日から11月4日の毎週土曜日、計4日間、11時30分から12時15分の45分間のプログラムで開催した。令和5年度より参加費を有料とし、事前にメールで申し込みを受け付け、抽選で当選者に参加してもらう方法で実施した。有料化に伴う付加価値としてオリジナルイルカポケットガイドを参加者に配布した。定員に対する平均応募率は297%と昨年度の263%とほぼ変わらず、事前申込抽選制や有料化したことによる参加意欲の減少は見られなかった。令和4年度は参加者の78%が年間パスポート保有者であったが令和5年度は50%で、当選が来館のきっかけになった方が多かったと推察される。プログラム内容は、回を重ねながらブラッシュアップしてきた甲斐があり、アンケートでは「おもしろかった」以上が100%と高評価であった。コメントでは「普段は見られない裏側が見れておもしろかった」、「イルカの飼育について知らないことが知れてよかった」など肯定的な意見が多く見られ、イルカや水族館の仕事についての興味と理解を参加者に深めてもらうことができた。来年度以降も継続して実施していきたいプログラムである。

⑬ 育成室開放

11月から3月の第3土曜日に実施した。通常入ることのできない育成室を職員立会いのもと入館者に開放し、入室者数を入口でコントロールしながら実施した。育成室内には解説パネルを設置したが簡易なものとし、参加者が注目している物に対しては職員が解説を行った。特に質問の多い物や注目してほしい物には大きめのパネルを用意した。また、入口でその回ごとにタイムリーな生物を案内した。11月から3月まで、育成室前に案内を掲示したことにより、令和4年度同様参加者が大幅に増加した。

⑭ ミナミイワビペンギン解説

ペンギン海岸観覧席を利用し、普段展示していないミナミイワビペンギンを実際に見てもらい、観察しながら形態や生態について解説した。間近で見ることが出来たことから多くの方が熱心に観察し、質問も多く寄せられた。開催を増やす要望があったことから、令和5年度から開催頻度を年1回から年2回に増やした。令和4年度の615名から2回合計で1,475名に増え、広く情報を提供できた。

⑮ 大人向け教室 写真教室

フォトコンテストと連携する形で実施した。水族館の楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することがとても難しい。しかし、

これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について、職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらうことができた。

#### ⑯ 海辺の漂着物探索

当館の地先海岸の砂浜で漂着物を収集・観察し、漂着物がどこから来たのか考えて、海の流れやつながりについて興味を持ち、また、海の保全について意識を高めることを目的として実施した。海岸で収集した漂着物を分類する、小さな漂着物(特にマイクロプラスチックに注目して)を砂と仕分ける作業を行った。アンケートに「色々なゴミが落ちていて驚いたし、色々な漂着物があって面白かった」「今まで意識しなかった海のゴミについて考えさせられた」とあり、地域の自然環境や海ゴミ問題に興味を持ってもらうきっかけを作ることができた。

#### ⑰ 舟に乗って水草刈りと泥上げ体験

人が利用し手を加えることで管理し、維持されてきた二次的自然である潟や水田、ため池などの環境管理や物質循環について、体験および専門家による講演を通して学ぶことを目的として実施した。当館の屋外展示施設「にいがたフィールド」の砂丘湖で舟に乗り、繁茂した水草の刈り取りや、ため池の水底にある堆積物の除去などを行い、かつて新潟市内の潟などで、水草を刈って食料や建築材とし、堆積物を肥料として利用していたことを体験を通して知ってもらった。「新潟市歴史博物館みなとぴあ」の学芸員、山田祐紀氏による講演「くじで田んぼを決める? -低湿地の水田耕作-」を併せて実施することで、専門的な知識と先人の生活を知る機会を提供できた。

#### ⑱ 愛称募集、命名式

##### ア. カマイルカ

令和4年8月9日に生まれた4頭目のカマイルカについて、順調な成長がみられたため3月10日から4月16日にかけて館内で愛称を募集し、2,594通の応募があった。新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを踏まえ、当初計画になかった命名式を実施することとした。8月7日、ドルフィンスタジアムにて応募者の中から2名を招待して実施した。

##### イ. トド

令和5年7月2日に生まれたトドについて、順調な成長がみられたため1月2日から3月6日にかけて館内で愛称を募集、3,027通の応募があった。応募期間については通常1ヶ月程度としているが、冬期であったため多くの方が足を運びやすいようにと2ヶ月に設定した。命名式は、3月20日、マリンサファリにて応募者の中から3名を招待し実施した。

#### ⑲ 海のミュージアムサポート海岸清掃

かねてより市民から開催要望が寄せられていたこともあり企画した。6月25日、7月17日、8月7日、9月18日、10月9日の5回で計画したが、8月は熱中症アラート発令、10月は雨天のため中止となり、計3回の実施となった。清掃の前にパネルで海洋ごみやマイクロプラスチックについてレクチャーすることで、海洋環境への理解を深めてもらうことを狙いとした。延べ183名の参加があり、環境問題への関心の高さが伺えた。

(5) 企画イベントの実施状況について

① 令和6年オリジナルカレンダープレゼント

毎年恒例のプレゼントとして、11月18日から希望する方先着1,200名へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

② クリスマスツリー展示

11月9日から12月28日の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ4.55メートルのクリスマスツリーを展示した。また、展示初日には、地域連携の一環として新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式及びクリスマスミニライブを実施した。

③ 門松展示

1月2日から14日の間、当館の敷地内に落ちている松などを使い、手作りで門松を製作した。正面入口に設置し、お正月の雰囲気を出した。

④ 二十歳のつどいキャンペーン

1月2日～15日の間、「二十歳のつどい」会場で配付したクーポン券チラシや、スマートフォンなどで当館HPのクーポン券などを提示した二十歳の集い対象者本人及び同行者1名を無料入館とした。また、館内レストランの割引クーポン券も併せて配付した。期間中、対象者109人とその同行者102人が来館した。

⑤ 年間パスポート販売キャンペーン

毎年実施しているキャンペーンで、年間パスポート購入者へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン(大人500円分、小人200円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。期間は1月15日～2月12日とし、期間中2,577人が購入した。例年、同時期に実施しているため、このキャンペーンに合わせて購入される方も多くみられる。更なる購入を促すため今後も継続していきたい。

(6) 専門的な調査・研究等について

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査・研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。令和5年2月14日に五十嵐浜で座礁し保護したカマイルカは、82日間にわたり治療、リハビリを続け、十分な遊泳能力を回復後、5月6日に寺泊沖で無事放流することができた。野生個体のレスキューに関するノウハウの蓄積につながった。

新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類に変わり、各種会議や研修会は対面での開催が増え、他園館との最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図った。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

日本動物園水族館協会第49回海獣技術者研究会では「カマイルカの飼育下繁殖4例における出生時の

対応と成長の比較」および「座礁したカマイルカの保護と放流」の 2 題を発表、日本水族館協会第 3 回水族館研究会では「ウミガラスの人工育雛の一例」、日本ウミガメ会議では「新潟市水族館で冬季に取り扱ったウミガメ類の漂着状況とその対応」を発表した。また、アクアマリンふくしまでの講演会「深海調査のひみつ大公開」では「ドグロのひみつ」、東京大学大気海洋研究所の水族館シンポジウムでは「水産研究機関との連携によるアカムツ研究への取り組み」、新潟市歴史博物館のみなとぴあギャラリートークでは「サメと鮫皮・鮫皮をさわってみよう」を講演した。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行った。水産庁さけ・ます等栽培対象資源対策事業の一環として、富山県農林水産総合技術センター水産研究所とアカムツに関する研究を行い、アカムツの親魚養成技術の開発を担当し成果を報告した。環境省生物多様性保全推進支援事業の「新潟県産コシノハゼ生息域外保全」として、コシノハゼの飼育と県内の生息地調査を行い、生活史および繁殖生態の解明を進めている。

他園館との共同調査では、ふくしま海洋科学館と ROV(遠隔操作無人探査機)による佐渡海峡海底の調査を行い、昨年に続きコクラゲの生息を確認した。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「親子魚探検隊」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況を明らかにした。関川村タランペクラブの「親子で川遊び - 川の生き物観察会 -」および、NPO ネットワーク福島潟の「福島潟いきものしらべ水生動物観察会」に講師として参加し、水生生物について解説した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

#### (7) 総合学習の受け入れ状況について

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子どもたちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めるキャリア学習の一環としての総合学習にも対応している。

令和 5 年度は新型コロナウイルス感染症による制限がなくなったこともあり、回数(45 回)、参加人数(1,264 人)ともに過去最大数となった。

来館した児童・生徒からは、多数の礼状や感想が寄せられた。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

#### (8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

実習生等の受け入れとして、専門学校生を対象に「飼育実習」、大学生を対象に「インターンシップ」「獣医実習」「博物館実習」を行った。新型コロナウイルス感染症の影響により令和 2 年より休止していたが、感染症法上の位置づけが 5 類に移行されたことに伴い 3 年ぶりに再開した。実習生等の受け入れは、博物館類似施設である当館として、専門学校生・大学生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」へ職員の講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分け

て「野外での観察等の指導」と「教室(屋内)での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

コロナ禍前、毎年継続して実施していた新潟大学臨海実習も3年ぶりに再開した。海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたい。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

#### (9) 市民ボランティアの活動の状況について

ボランティア活動の目的を大きく「水族館(専門家)と来館者(非専門家)をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。

令和5年度は10人が新規に登録した。なお、まだ新型コロナウイルス感染症の影響があるため、活動する際には体調管理の徹底をお願いした。

活動状況は活動日数127日(令和4年度=131日)、活動延べ人数319人(令和4年度=358人)と活発な参加が見られた。

今後も、水族館・来館者・ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

#### (10) 広報および広告宣伝について

##### ① テレビCMとラジオCM

テレビCMは、企画展示「魚の色」、年間パスポートキャンペーン、令和3年度秋に新規で制作した「いきものの、アレどこ?」の3種を放映。また、県内、山形、福島テレビ局のCM付帯パブリシティ枠にて、時期に合わせたPRを多数実施した。TeNYでは「週刊マリンピア通信」として毎週金曜日の夕方に放送するシリーズを継続し、内容も飼育生物についての旬な情報を放映するように努めた。ラジオCMはBSNラジオで放送した。加えて、夏期はBSNラジオにて館内からの生中継と、スタッフがスタジオで生出演リスナーの質問に答えるなどした。冬期もスタジオで生出演し旬の情報のPRを行った。

##### ② 雑誌・新聞などの紙媒体への広告

雑誌は、県内のお出かけ特集雑誌や月刊誌(子供の遊び場特集)へ継続掲載した。新聞は、新型コロナ禍前に実施していた山形県・福島県・群馬県、長野県の新聞へ夏期誘客の広告を出稿した。また、令和3年度より実施している、産経新聞 新潟・長野・山梨版で月2回生物コラム連載を継続して実施した。同じく令和3年度から実施しているこども環境新聞エコチル新潟版へ、月1回生物情報の提供も継続して実施した。

##### ③ WEB

オウンドメディアへの展開としては、当館ホームページ、X、LINE@、Facebook、Instagramなどの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。また、現場の飼育スタッフがXを利用しタイムリーな生物情報の発信に努めた。また、有料WEB広告として、9月に山形・福島・群馬・埼玉を対象にYouTubeとInstagramに企画展示「魚の色」を出稿、1月は県内に向けYouTubeに年間パスポート

トキャンペーンを出稿した。

④ プレスリリースなど

プレスリリースは、各イベント・生物情報の提供を積極的に行い、多くの取材の申し入れがあった。特にフンボルトペンギンの移送、搬入では、調査研究、種の保存など水族館のもつ役割や全国の他園館との連携について告知することができた。また、生物やプログラムの紹介だけでなく、学校との連携(明訓中学校トレットペーパー受贈、鳥屋野中学校パンフレット監修、新潟大学附属新潟小学校成果発表会)についてもリリースを実施し、展示以外の活動について告知に努めた。

⑤ その他

「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」の一つとして位置づけており、その主なものとして、新潟県内の幼稚園や保育園、小学校や福島、山形、群馬県内の小学校にチラシを配付した。また、全国・地方テレビ番組からの生物に関する質問や写真映像等の借用依頼にも積極的に協力し、番組内で館名をクレジット表示してもらうことにより、館名と専門性の認知度向上に努めた。

(11) 他園館との協力について

上越市立水族博物館、ふくしま海洋科学館、大洗水族館、下田海中水族館と生物交換を実施した。また、しながわ水族館、海遊館、下関市立しものせき水族館、札幌市円山動物園、いしかわ動物園、のとじま水族館、飯田市立動物園、福山市立動物園、伊勢シーパラダイス、東京都葛西臨海水族園、千葉市動物公園、アクアマリンふくしまとブリーディングローンを行っている。

さらに、東京都葛西臨海水族園のリニューアル工事に伴い、フンボルトペンギン 20 羽、また、能登半島地震により、のとじま水族館からカリフォルニアアシカ1頭の受託飼育を行っている。

その他、ふくしま海洋科学館と共同での調査・採集活動のほか、市民ボランティア活動の研修として 3 月 30 日にボランティア 16 名、職員 4 名が鶴岡市立加茂水族館を視察した。

(12) 年間入館パスポートについて

令和 5 年度の年間パスポートの購入者は、15,971 人(総入館者の 2.9%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は 90,080 人(総入館者の 16.6%)となった。また、パスポート利用者の平均入館回数は 5.6 回であった。

コロナ禍においては、総入館者数に対する購入者及び利用者の割合が共に高い状態を維持していたが、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが5類に引き下げられたことにより、コロナ禍前の割合にほぼ戻った。購入者数は過去最高であった令和 4 年度を若干下回ったが、年間パスポートへの需要が依然として高い。特に例年実施している購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」の時期には、令和 5 年度も多くの方に購入いただいた。今後も生物に関する話題や特別展示などの情報提供を積極的に行い、年間パスポート保有者に繰り返し来館していただき、さらに継続して購入していただくことが入館者増や当館への評価向上に繋がると考えられる。

また、令和 4 年 12 月から運用を開始したデジタル版年間パスポートについては、年間パスポート購入者 15,971 人のうち、5,576 人、34.9%の方が利用されている。デジタル版への移行によりカード発行枚数が少なく、経費削減に繋がることから、普及率をさらに上げ 50%以上となるよう周知を図っていきたい。

年間パスポート保有者へのアンケート調査でも、「生き物の展示」について 96.6%の人が「非常に満足」「満足」

と回答しており、季節感のある展示や特別展示などを行い、いつ来ても新鮮さを感じられたことが評価されたと考えている。「いつも楽しく来させてもらっています」「楽しかった」「この水族館が大好きでよく来ています」などの声のほか、「地震にも負けずに頑張っていて良かったです」などの声もいただいている。また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては90.8%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

### (13) 市・他団体等との協力

#### ① 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」の導入

新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」により、「文化・観光施設共通割引」を実施した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引料金で入館でき、新潟市では7,334人、新潟市以外では1,210人のお客様が利用された。

#### ② 一般社団法人日本自動車連盟(JAF)会員割引

全国的な自動車ユーザー団体である一般社団法人日本自動車連盟と連携し、会員に対し当館のPRを行い、会員証提示で割引を行った。入館促進が図られ、44,935人のお客様が利用された。

#### ③ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛

内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行った。33,167人のお客様が利用された。

#### ④ マイナンバーカード取得者及び申請者への特典

令和4年11月から、新潟県のマイナンバーカード普及率向上のための事業に協力し、マイナンバーカード所有者・申請済者向けの特典付与を9月末まで実施した。4月からの半年間で4,240人が利用された。また、7・8月には夏休みキャンペーンとして学生を対象に全額無料を実施した。期間中、1,114人が利用された。

#### ⑤ 県立がんセンター新潟病院 小児病棟へのライブ配信

令和4年度2回実施した県立がんセンター新潟病院小児病棟への配信を令和5年度も2回、7月と3月に実施した。がんセンターでは入院中の病児への保育活動をボランティアが実施しているが、その活動時間に合わせ、Zoomを利用して実施した。入院している患児と保護者は小児病棟のプレイルームの大型テレビや病室で観覧した。約1時間で日本海大水槽、日本海個水槽、ペンギン、トド、イルカショーなどをライブ配信した。来年度の実施も希望していることから、継続していきたい。

#### ⑥ 青陵大学学園祭(青空祭)ブース出展

ミュージアムショップ、レストランの物販を展開した。ミュージアムショップはカワウソくじを中心としたグッズ、レストランはチュロスを販売し、両店舗とも一時は補充が追いつかないほどの盛況ぶりであった。校内にはコロナウイルス感染症の流行前に実施したときの販売物が飾っており、出店の効果は高いと感じられたため、継続して実施していきたい。

⑦ イオンモール新潟南 新潟県環境対策課 マイクロプラスチック探しワークショップ

新潟県環境対策課から共同出展の依頼があり 12 月 3 日、イオンモール新潟南の 1F ホールで実施した。ブースを一体化させ、相互に呼び込み、サポートをすることで多くの来店者に足を止めてもらうことができた。環境対策課はごみ問題のアンケートを実施、回答者にノベルティを配布。当館はビニール袋とミズクラゲの比較水槽をはじめ、海洋ごみの解説パネルなどを掲示。マイクロプラスチック探しワークショップが好評であった。

⑧ にいがた環境フェスティバル 2023 出展

12 月 23 日新潟県主催「にいがた環境フェスティバル 2023」に出展した。令和 4 年度まで万代島多目的広場(大かま)で開催されていたものが規模を拡大し、朱鷺メッセのホールでの開催となった。出展ブースでは、海洋を漂うゴミをメインテーマとし、ミズクラゲと海を漂うビニールを対比させての展示や、砂浜に打ち上がるマイクロプラスチックを選り分ける体験を行った。パネルもそれに合わせた海洋ゴミや生物への影響などの解説を掲示することで、より SDGs を意識した展示とした。12 月 3 日のイオンモール新潟南への出展時同様に新潟県環境対策課と隣接ブースとし、相互に呼び込みなどのサポートをすることで多くの来場者に足を止めてもらうことができた

⑨ 県立図書館 漂着物パネル展示(新潟県資源循環推進課)

新潟県資源循環推進課より、同課に割り振られた会場であるが、12 月 3 日イオンモール新潟南で提供したパネル内容が予定していたテーマと合致することと、12 月 13 日から 27 日まで新潟県立図書館の入口ホールの掲示スペースの提供を受け、海洋ごみについてパネルと漂着物の実物展示を行った。

⑩ 潟(かた)フェス 2024 出展(新潟市環境政策課)

令和 4 年度初開催の事業で、令和 5 年度は 2 回目となる。2 月 12 日新潟日報メディアシップにて、新潟市環境政策課主催の「潟(かた)フェス 2024」に出展した。潟に生息する生物(シナイモツゴ、キタノメダカ、ヒメタニシ、ドジョウ)の生体と解説パネル、潟などの環境を模した屋外展示にいがたフィールドの紹介パネルを展示した。多客で混雑していたため急遽スタンプラリーのポイントとなってほしいと依頼があり協力した。おかげで多くの参加者の足を止めることができた。ホールでは市内の小学校などが研究発表を行っており、学校教育の現場でラムサール条約認定自治体についてどのように取り上げられているかを垣間見ることができた。

⑪ ちょ〜生き物発表会シーズン 6

当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークを母体としたちょ〜生き物発表会実行委員会に参画し、企画・当日運営の一翼を担った。会場は新潟県立自然科学館で、他にオンライン配信も行った。展示コーナー・体験コーナー・発表会を合わせて参加者は延べ約 600 名であった。発表会には新潟県内で生きもの調査研究をしている NPO や高等学校生物部、博物館などが参加し、9 題の発表の他、「生き物とともに生きる人びと」と題した座談会を行った。当館からは「座談会」に 1 名が登壇者として参加し、体験コーナーで「マイクロプラスチックでレジンアート」を行った。

⑫ ジュニア学芸員養成講座



本講座は、当館もメンバーであるいがたダイバーシティネットワークが主催し、新潟県立植物園など市内にある5つの施設の協力で行われた。対象者は中学生・高校生で、7名が参加した。5月28日に新潟県立植物園で行われた第1回から12月10日までの全6回のプログラムで、当館は7月2日に実施した第2回の講座を行った。

⑬ 新潟市里潟研究ネットワーク会議への参加

新潟市環境部環境政策課が事務局となっている新潟市里潟研究ネットワーク会議に令和5年度も引き続き参加した。会議では、ラムサール条約湿地自治体認証を記念した当館の事業についての紹介を行った。

⑭ 第9管区海上保安庁による灯台記念日155周年展示イベントへの協力

令和4年度につづき、令和5年度も10月28日、29日に第9管区海上保安庁による灯台記念日155周年展示イベントをアクアラボで開催し、2日間で約600名の入場があった。展示パネルなどは海上保安庁が設置した。また、両日とも海上保安庁特別講座「うんこドリルでクイズ大会」を団体休憩室で開催、各日50名以上の参加者で賑わった。海洋ごみ同様に、海にまつわる話題から海洋環境、海洋生物についての興味を引き出す良い機会となった。

⑮ ばんえつ発見の旅サポートイベントへの参加

6月10日、11日郡山市のイオンフェスタで、アクアマリンふくしまが事務局をつとめ、磐越沿線の公共施設が参加する「ばんえつ発見の旅サポート」のイベントに参加。公共施設等11団体が出展し、それぞれワークショップなどでPRを行った。2日間で3,976人(当初目標3,000人)の集客があった。当館は「海岸の砂からマイクロプラスチック探し」と「いきもの塗り絵缶バッジ」を実施し、来場者の切れ目がなく、大変な盛況であった。令和5年度はイオンフェスタが改装に入ることもあり、新潟市での開催を打診されたことから、平成30年同様にいくとびあ食花にて開催の予定である。

### 3. 入館料収入の実績について

令和5年度入館料収入 465,190,538円(対前年度比107.0%)

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適正に実施した。入館者数は543,257人、令和4年度の514,910人から28,347人増加、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標の500,000人を達成した。入館料収入も465,190,538円で令和4年度の434,637,276円から30,553,262円と大幅に増加し、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標452,500,000円を達成した。客単価も856円で令和4年度の844円から12円上がり、コロナ禍以前(令和1年度849円)を超える単価となった。割引や減免の対象とならない観光客が増加したためと考える。

収入増対策として、例年同様、学校の夏休みに合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟市外の県内と山形、福島、群馬の小学校へ割引券付チラシ(提示で1組全員2割引)を配布した。また、例年同様12月には冬場の閑散期対策として新潟市内の小学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行った。実施期間中、16,276人のお客様が割引券チラシを利用したことから、来館の動機付けに一定の効果があつたと考えられる。

全国で共通展開する「子育て支援パスポート事業」では、33,167人のお客様に来館いただいた。県外からのお客様の利用もあり、この割引制度が全体的に周知されてきたと思われる。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続して実施している。入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施しているが、今後来館する幼稚園・保育園、小学校、高齢者施設、福祉施設など免除対象が増えることが見込まれる。当日の窓口対応や団体休憩室の予約など業務の煩雑化が予想されるが、状況を把握しながら不備のないよう行っていきたい。

#### 4. 管理経費等の収支決算について

令和 5 年度も引き続き、エネルギー価格をはじめ、様々な物価が高騰した。特に電気料金の高騰は著しく、水族館運営にも大きな影響を与えた。令和 3 年度と比較し、電気料金は令和 4 年度に約 32,000,000 円、令和 5 年度はさらに約 4,000,000 円増加した。水族館は飼育生物の生命を維持するため 24 時間 365 日機械設備稼働させ水温や水質を維持する必要があるため、大幅な節電が非常に難しい。館内の室温設定や機械設備稼働時間短縮など出来る限りの節電を行った。その他、時間外勤務の削減や物品購入の適正化を図るなど経費削減に努め、また、新潟市からは光熱費の不足分の一部、約 21,000,000 円を支援していただくことになったが、電気代の高騰の影響は大きく、予算の範囲内に収めることが出来なかった。令和 6 年度は、エネルギー高騰分も見込んだ指定管理料額での年度協定が見込まれている。その範囲内で管理運営するよう努力する。

修繕工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所をはじめ、リニューアル工事で更新した建物・設備についても、経年による不具合が生じてきている。その都度修繕工事を行っているが経費が依然として嵩んでいる。今後も大規模修繕が発生した場合や不具合が予想される場合は、市と協議しながら行っていきたい。

また、令和 5 年度は、新潟市包括外部監査において、翌年度夏季賞与について、当年分の見込み額を引当金として計上しなければならないという指摘を受け、賞与引当金繰入額として約 14,000,000 円を計上した。そのため、支出が大きくなった。これについて令和 6 年度以降は、引当金を取り崩し支払うため予算内で収まる。次期指定管理期間も「最小コストで最適な管理」を目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

## 5. 最後に

令和 5 年度の入館者数は、543,257 人(対前年度比 105.5%)、入館料収入は、465,190,538 円(対前年度比 107.0%)で、共に令和 4 年度を上回った。5 月に新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが「2 類相当」から「5 類」に移行されたことにより全国的に旅行意欲が高まり、当館においても帰省客や行楽で県外から来館される方が増えたためと思われる。また、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数 500,000 人、入館料収入 452,500,000 円も達成し、特に入館料収入は、この指定管理期間で初めて評価指標を上回った。

年間パスポートは、購入者数が過去最高であった令和 4 年度を若干下回ったものの、15,971 人のお客様からご購入いただき、新潟市民の年間パスポートに対する購入意欲は依然として高い。次期指定管理期間も購入者及びリピーター数を今まで以上に増やしていきたい。また、令和 4 年 12 月から開始したデジタル版年間パスポートは 2 年目を迎えている。現在は普及率が約 35%まで上がっており、デジタル版への移行は、発行に係る手続きの簡素化や経費の削減にも繋がるため普及率をさらに上げていきたい。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 98.9%、イルカショー、解説プログラムをご覧になった方で「非常に満足」と「満足」の計が 98.3%と満足度は依然として高水準を保っている。全体的な感想として「また来たい。楽しかった」「見所がたくさんあり館内も水槽もきれいで良かった」「イルカショーが他より素晴らしかった」「学べる水族館でとてもよかった。関東の水族館にも負けない内容でした」「日本海や新潟にスポットライトを当てた展示は初めて見たので新鮮でした」などの感想が寄せられており、多くのお客様に喜んでいただいている。また、「子どもの遊び場や外にベンチなどがたくさんあり 1 日楽しむことができた」「券売窓口での接客がとても良かった」「トイレがキレイに清掃が行き届いていました」「皆さん親切で長時間いても楽しめました」など展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。また、年間パスポート保有者を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 28.7%(対前年度 36.9%)と令和 4 年度と比較し減少しているが、3・4 回目の来館者が増加しているため、繰り返し来館していただいているお客様も多く見受けられる。県外からのお客様は「はじめて」が全体の 58.8%と最も多く、県外では一度も来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様は、来館回数 4 回以上が全体の 64.7%と圧倒的に多く、今後も当財団が掲げるビジョン「新潟で一番愛される施設」を目指し、常に新鮮味のある展示を心掛け、何度も足を運んでいただける運営に一層努めていきたい。

施設・設備については、令和 5 年度に計画していた大規模修繕を 3 件実施した。そのうち「海水取水設備水管橋改修工事」と「日本海大水槽躯体改修工事」は、令和 4 年度諸事情により延期となっていたが、それぞれ 10 月と 3 月に完了した。その他、「イルカ棟屋根改修工事」は 3 月に完了した。その他の施設・設備についても、老朽化などにより突発的な不具合が十分考えられることから注意深く維持管理を行い、新潟市と協議しながら、早めの対応で事故防止を図りたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムや磯のいきもの解説など体験型プログラムを継続して行った。その他自主事業で行うプログラムも、計画どおり実施した。また、7 月 14 日から 2 月 25 日まで開催した企画展示「魚の色」では、会場設営費など船の科学館「海の学びミュージアムサポート」から助成を受けて開催した。魚の色や模様、その役割に焦点を当てた充実した企画展示とすることができた。

高病原性鳥インフルエンザへの対策について、今シーズンは昨年ほどの流行とはならなかったが、9 月に東京都葛西臨海水族園よりフンボルトペンギン 20 個体を預かっていることもあり、当館のマニュアルの基準より前倒しで防鳥ネットや靴底消毒マットの設置を行った。今後も渡り鳥が飛来する時期は様々な方向から情報を集め、状況を見ながら早めの対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優

先に被害の防止に努めたい。

1月1日に発生した能登半島地震では、当日は休館日であったが、飼育職員9名と委託業者社員2名が業務を行っていた。地震発生直後、津波警報が発令されたため、全員が新潟県護国神社へ避難し人的被害はなかった。翌2日の開館については、新潟市と協議し、津波警報が解除された場合は開館することとし、夜中の1時頃に解除となったため通常どおり開館した。施設に大きな被害がなかったが、一部の水槽からの水の溢れや壁の損傷、屋外観覧通路に数センチの段差、カワウソ水槽の漏水などが確認された。この地震により、新潟市内でも一部地域で大きな被害があり、2・3日の入館者は、対前年度比64.9%と下回った。

当財団は、令和1年度より5年間の指定管理者の指定を受け、最後の年の管理運営を行った。令和6年度からは新たに5年間の指定を受け、管理運営を再び行うこととなった。物価の高騰が依然として続いている中、安定した水族館運営を行い、法人としても健全な経営ができるよう努めていきたい。

新たな指定管理期間も新潟市水族館のさらなる魅力づくりを目指し、ビジョンである「新潟で一番愛される施設」となるよう平成2年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。